

別紙（事後評価書）

令和4年度文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）

<p>通し 番号</p>	<p>4</p>	<p>事業区分： 劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業 助成対象団体名： 公益財団法人東京都歴史文化財団 施設名： 東京芸術劇場</p>
<p>助成対象活動に関する評価 （妥当性）</p> <p>当該劇場・音楽堂等は、4つのミッション「芸術文化の創造・発信拠点」「人材育成の拠点」「教育普及の拠点」「賑わいの拠点」を掲げ、「舞台芸術の創造現場を魅せる劇場」を目指し事業を推進してきた。</p> <p>4つのビジョンは、ミッションと1対1で設定されていたが、6つのアウトカムとミッション及びビジョンとの明確な連関があるとは言い難い。また、アウトカムと目標が同じであるほか、目標と指標に整合が取れていないものもあり、ミッションの達成は判断できない。</p> <p>平成30年度から令和3年度までの自己点検報告書では、「アウトカムの発現を目的に6の目標と10の指標を定めた」としており、アウトカムを目標として捉え、アウトプットを指標としていることが判明した。また、同報告書では、平成30年度の要望書に設定がない指標が、新規で5つ付け加えられており、ミッションとの連関をより複雑にしている。</p> <p>令和2年度には、アウトカム、目標・指標、事業計画との連関を整理したが、事業計画に必要な構成要素が有機的に連関しておらず、当初の予定どおりに事業が進められているか判断できない。</p> <p>令和4年度は、総体的には例年どおり多彩なプログラムが発信され、「舞台芸術の創造現場を魅せる劇場」としての役割を十分に果たした。なかでも、共生社会の実現のため、オンライン形式により実施された社会共生セミナーは、障害者の文化芸術活動の拠点形成プロジェクトを題材として、文化による多様な価値観の形成と劇場職員の知識習得を目指しており、当該事業の企画と構成力に先導性が認められた。また、障害者の参加を促し、共に考え課題解決を図ることで、当事者と劇場との距離を縮め、新しい創造を生み出す場について好事例を示した。</p> <p>一方、令和2年2月より新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けたものの、採択時の平成30年度から令和3年度にわたり、大規模な劇場にふさわしく、音楽、舞踊、演劇など多彩な企画がラインナップされた。コロナ禍の影響により中止となる事業もあったが、他の事業は予定どおり実施され、首都圏の文化芸術環境に刺激を与えていた。具体的に音楽分野では、海外からの招へい公演は困難であったものの、藤倉大『ソラリス』の日本初演や、芸術監督の演出作品『フィガロの結婚』などが高評を得た。舞踊分野では、現代ダンスにおける最高峰のカンパニー「ローザス」の招へいを行うことで、世界最前線の作品を日本で披露し、演劇分野では、実験的な作品を含めた多彩な作品と若手の育成に力を入れた。また、芸術監督自らの代表作『赤鬼』では、配信を利用した国際フェスティバルの参加等により、世界に向けて日本現代演劇の最前線を届けた。さらに、地域における共生社会実現への貢献として、豊島区を中心に、あらゆる人々への芸術体験の場を提供するなど、池袋かいわいのコミュニティの創造と再生に力を入れた。</p> <p>以上のことから、助成に値する文化的、社会的意義等は一定程度認められた。</p>		

別紙（事後評価書）

（有効性）

妥当性で記したとおり、ミッションから事業計画までの連関が不明確であり、アウトカムの発現は、極めて困難である。また、平成30年度に掲げた10の指標のうち、2つの指標でおおむね達成できたが、目標を明確に達成できたものは、1つにとどまった。

具体的に海外劇場・コンサートホールと継続的関係を目指し、支援期間中に3館と文書を交わすという指標では、現時点で4館との実績を作り、交渉継続中や、交渉に着手した館も見受けられ達成したと認められる。また、外部講師の引受け件数10件/年以上という指標については、令和2年度に目標値10件に対し7件と達成できなかったものの、それ以外の年度では、目標値を大きく上回る実績値を出しており、おおむね達成していたと認められる。しかしながら、その他の指標は達成できていないことから、アウトカムが発現したとは言い難い。

令和4年度は、新型コロナウイルス感染症による影響で中止した事業等を除く15事業について、うち8事業は目標達成率が平均で約64%にとどまったものの、7事業が目標を達成した。

（効率性）

事業はほぼ計画どおり実施されており、事業期間は適切であったと認められる。

また、事業費については、要望時の予算額と報告時の実績額とを比較すると、一部の費目に増減があったものの、ほぼ計画どおり執行されており、適切であったと認められる。

ただし、一部事業において過度の予算増減も見受けられるため、より正確な予算積算を求めたい。

（創造性）

オペラ制作上困難で上演機会に恵まれない作品をコンサート形式により実施するコンサートオペラシリーズvol.6において、平成30年度に初演した藤倉大作曲『ソラリス』は、企画段階から現代オペラに挑戦したことが国内外で高く評価された。

また、令和3年度同シリーズvol.8『人間の声』では、【ある女】役のソプラノ歌手が、別れを告げた恋人との電話でのやりとりから自死に至るまでの40分余の心理ドラマを手堅く歌い上げた。機動力のあるオーケストラで指揮者が多彩な響きを引き出し、ソリストと一体となった緊密な表現で聴衆を魅了した。後半の『アルルの女』では、オーケストラがドラマティックな音楽を奏でる中、指揮者の翻案による台本を4人の俳優が朗読し、それぞれの役柄を巧みに演じた。

令和2年度の舞踊事業では、芸劇dance 田中泯による『村のドン・キホーテ』が第15回日本ダンスフォーラム大賞を受賞した。思い出深いジャズやクラシックなどバラエティに富んだ音楽と共に踊るシーンや日常を思わせる田植えを取り入れた振付など見どころ満載であった。とりわけ終盤のソロは、生命・自然・エネルギーを巡る「気」を捉えた身体として、舞踊そのものの魅力が伝わってきた。舞踊を通して伝えられること、舞踊の力強さを発信した当該事業の存在意義は多大であった。

令和3年度では、佐々木蔵之介主演 森新太郎演出『冬のライオン』において、ヘンリー二世の愛妾役に抜てきされた女優が、瑞々しく初々しい演技の中に、運命に翻弄されていく心の動揺や葛藤を素直に露出し、芯の強い女性として演じきった。また、恐妻役を演じた新劇団出身のベテラン女優は、貫禄と風格を兼ね備えた安定感のある演技で好演した。クリスマスの夜に巻き起こる骨肉を争う権力闘争、権力奪取にあえぐ化かし合いの家

別紙（事後評価書）

族劇を2名の女優がけん引した。ただし、バックグラウンドの違う俳優のキャスティングは、演技手法や身体性に統一感がなく、演出の意図を十分に踏まえて演じていたとは言い難い。

以上のことから、事業計画の内容が、独創性、新規性、先導性に優れているとおおむね認められる。また、当該事業計画を通して国内外での評価の向上につながったと一定程度認められる。

令和4年度については、我が国では上演機会の少ない海外戯曲を取り上げ、ルーマニア出身のスタッフと日本人スタッフ・キャストによる質の高い協働制作が成果を上げた。

青少年を対象にした朗読音楽劇では、複数の人物を巧みに演じ分けた若手俳優がメリハリのある語りで聴衆を物語の中へ引き込み、演奏家は生き生きとした音楽を奏でた。

当該劇場・音楽堂等の芸術監督が主宰する東京演劇道場に所属する俳優たちによる公演は、従来の演出手法の更なる練り上げや人形を活用した新たな発想など、独創的な演出であったが、将来性のある俳優たちの個性や魅力を引き出すまでには至らなかった。

他に、共生社会を育むセミナーや池袋西口公園と連携したジャズコンサートなど、多様な人々が文化芸術に親しむ機会を提供した当該劇場・音楽堂等の取組は優れていた。

（持続性）

当該劇場・音楽堂等は、令和3年度から6年間の指定管理者として、東京都から特命指定を受けたことにより、都合10年間の指定管理者として、中長期的な観点からの事業推進が可能となった。

経営基盤の強化については、令和2年度が開館30周年事業と重なり、企業協賛金が増額し、コロナ禍でありながら、公的資金、民間助成金、寄付金等の資金調達に成功している。

人事面では、平成30年度～令和3年度自己評価点検報告書の持続性に記載されており、常勤契約職員の固有職員化を進め、雇用転換数は微増している。多様な研修機会も設け、職員の能力を発揮できる環境を整えていることも認められた。また、情報セキュリティ研修、文書研修、契約事務研修、コンプライアンス研修等を計画し、実務的な研修の充実にも努めている。

以上のことから、事業計画を通じて組織活動が持続的に発展すると認められる。一方、妥当性及び有効性の判定が不明確であり、持続的なアウトカムの発現・定着が期待できるとは認められない。

令和4年度については、安定的な財源確保や職員の人材育成を推進することに努めた。特にプロフェッショナル人材養成研修事業の修了生が、他の劇場や機関に就職している。当該劇場・音楽堂等が、若手・中堅人材に対して雇用機会の創出を図るきっかけをつくっており、今後を期待する。

（総 評）

東京都は、令和元年12月「成長」と「成熟」が両立した、輝ける「未来の東京」に向けた取組を全力で進めるために、「『未来の東京』戦略ビジョン」を策定した。その中で、令和12年に向けた戦略として、戦略15「文化・エンターテインメント都市戦略」を掲げ、「都立文化施設をコアに国と民間とのネットワークを強化し、多様な魅力の集積を世界に発信するとともに、新たな賑わいをつくっていく」とし、当該劇場・音楽堂等の位置づけを明確にした。

別紙（事後評価書）

また、「芸術文化の力を活用し、文化の領域を超えて、高齢化や共生社会などの社会課題の解決に貢献する」として、東京の社会課題に取り組むとしており、当該劇場・音楽堂等が掲げるミッション「教育普及の拠点」をさらに推進することが期待される。

加えて、当該劇場・音楽堂等は、令和3年に開催された東京オリンピック・パラリンピック競技大会の文化レガシーを継承・発展することが大いに求められた。実際の事業では、大規模音楽祭や東京芸術祭に加え、当該劇場・音楽堂等を中心に多様なフェスティバルを開催し、東京2020大会文化プログラム「Tokyo Tokyo FESTIVAL」が令和3年9月まで継続された。また、期間中のコロナ禍の影響を踏まえ、新たな事業展開としてデジタル化を進め、現代の社会環境への対策として取り組んだ。

以上のことから、大都市圏を代表するトップクラスの公立劇場として、芸術性とエンターテインメント性を両立させる事業を行うとともに、公的資金を活用した劇場経営により、公益性の高い事業を推進し、当該劇場・音楽堂等の存在意義をより一層高めることを期待する。

民間劇場出身の経験豊富なプロデューサーたちによる総合的な企画力は、上演機会の少ない海外戯曲の上演、国際的な協働制作、次代の観客育成を目的とした上質な音楽プログラムなど、劇場が有する人的資源の強みを生かして、我が国の実演芸術の水準向上に貢献していた。

また、当該劇場・音楽堂等の芸術監督が主宰する東京演劇道場に所属する俳優たちは、戯曲解釈、台詞の明瞭さ、俊敏な身体性など、個々の強みを生かしながら緊張と集中力を自在に使い分ける将来性豊かな人材であった。今後、国内外でのさらなる躍進が期待される。

以上により、当該劇場・音楽堂等の潜在力を生かして、多様な人材や機関と連携しつつ、東京圏における地域コミュニティの創造と再生に尽力しており、戦略的な事業計画を実行していることが認められた。